



# 南三陸の小さな漁村「波伝谷」 海の恵みを一身に受け 地域と深く関わりながら 生きている人たちの物語

白石市福岡在住の映画監督・我妻和樹さんが  
南三陸の小さな漁村「波伝谷」を舞台にした  
ドキュメンタリー映画を制作！  
震災前の南三陸に流れる時間と美しい風景  
そこには生き生きとした人の営みがあった

## 映画「波伝谷に生きる人びと―第1部―」

2008年3月から2011年3月11日にかけて  
東日本大震災前の南三陸「波伝谷」に生きる人びとの日常を追ったドキュメンタリー  
我妻監督に映画制作を始めたきっかけや作品への想いを伺った

### 南三陸「波伝谷」を舞台にした 映画制作を始めたきっかけ

東日本大震災の3年前から、南三陸町の海沿いに位置する「波伝谷」という戸数約80軒ほどの漁村で、ドキュメンタリー映画を作っていました。内容は、波伝谷という一つの地域社会の中で、互いが深く関わり合いながら生きている人びとの日常と、その豊かで複雑な世界に分け入る自分自身を描いたものです。波伝谷は、東日本大震災による津波で、たった1軒を残し、ほとんどが消滅して

しまいましたが、もともとの波伝谷との出会いは、東北学院大学の学生時代に、在籍していた民俗学ゼミと、東北歴史博物館の共同による民俗調査に、学生の一人として参加したのがきっかけでした。初めて波伝谷を訪れたのは大学1年も終わりに差し掛かった2005年の3月12日のことでした。学生時代も合わせると、僕は震災のちょうど6年前から波伝谷と関わってきたこととなります。学生時代に民俗学を学び、波伝谷に入り続けた期間というのは、僕にとって人生でかなり重要な期間

でした。先生方や先輩方、同輩や後輩たち、そしてライバルと夜が明けるまで多くの議論を交わし、恩師の前で涙を見せることも多々ありました。一つの地域社会の背景と現在の人の営みをつぶさに見つめ、そこで感じた自分自身の主観を大事にする。「民俗学は学問である以上に文学である」というスタンスは、その後の「ドキュメンタリーは客観的記録である以上に主観的なフィクションである」という自分自身のスタンスに大きな影響を与えることになりました。

この調査の中で出会った波伝谷の人たち、そこで聞かれた数々の言葉、何より印象的だったのは、この波伝谷に生きる人びとにとって、「部落」というものが常に大きなものとして、日常の中に、そしてその人自身の心の中に存在しているということでした。宮城県の農漁村部では、自分たちが住む集落のことを愛着をもって「部落」と呼びます。

映画「波伝谷に生きる人びと―第1部―」のシーン画像は我妻監督提供



## 我妻 和樹 監督

Director : Kazuki Agatsuma

あがつま かずき 1985年白石市福岡長袋生まれ。福岡中、白石高校を卒業後、2004年4月に東北学院大文学部史学科に入学。翌年3月から同大学の民俗学研究室と東北歴史博物館の共同による、宮城県本吉郡南三陸町戸倉地区波伝谷での民俗調査に参加。2008年3月の報告書の完成とともに大学を卒業し、以後個人で波伝谷での映画制作を開始する。制作に5年半の歳月を費やした本作は、2013年8月15日に行われた波伝谷での試写会をもって完成となった。

